

今週の話題：

## &lt;重症急性呼吸器症候群 (SARS) &gt;

WHO の Global Outbreak Alert and Response Network(国際的感染症対策ネットワーク)は、SARS の原因となる病原因子の特定を迅速に行うための 9 カ国から 11 施設が参加する国際研究プロジェクトを取りまとめている。この協力体制により、より正確な診断が可能となり、診断検査法の開発が進むであろう。進展は著しく、病因となる病原因子の最終的な特定があと数日の間に行われると期待できる。

3月26日に、SARS の臨床像と治療法に関する初の国際症例検討会の電子会議が、WHO により、13 カ国 80 人の臨床医の参加で開催された。この会議の議論の要約、結論に関しては：WHO のサイト <http://www.who.int/csr/sars> に掲載されている。

集団感染に関する毎日の最新情報と累積患者数もウェブサイト公開されている。2003年3月26日に中国当局は昨年11月16日から本年2月28日の間に SARS の 792 症例(31 例の死亡例を含む)が発生したことを公式に報告した。これらの新しいデータにより世界中から報告された SARS の可能性例は、昨年の11月16日にさかのぼると 1,323 症例、死亡例 49 例となる。中国のデータを除外して3月25日と比較すると、主として香港に集中する 41 症例とシンガポールの死亡例 1 例が増加したことになる。詳細は <http://www.who.int/csr/sars/en> に掲載されている。

WHO は継続的な調査をもとに航空会社や旅行者に絶えず勧告を出している。3月15日に発行された WHO の緊急渡航勧告に対する何らかの新たな情報は速やかにサイト上に公開される。

(SARS に関する詳細情報は 2003.4.4 発行予定の Weekly Epidemiological Report No.14 を参照)

## &lt;ポリオ根絶への進展、エジプト、2002年&gt;

1988年にWHOの世界保健総会において世界中のポリオ根絶を決議して以来、ポリオを有する国の数は2002年で125ヶ国から7ヶ国にまで減少した。概算のポリオ症例数は99%以上減少し、WHOの3地域(アメリカ、ヨーロッパ、西太平洋)ではポリオ根絶が確認されている。東地中海地域でも著明な進展が見られ、23ヶ国のうちポリオ発症がみられるのは4ヶ国である。エジプトでは、撲滅への長い努力にもかかわらず、野生型ポリオウイルス(1型)の伝播が続いている。しかし、最近のデータにはサーベイランスと予防接種活動の著しい向上とウイルス伝播阻止のためにこれらを強化する必要性が示されている。

## \* 定期的な予防接種：

幼児に対する3回以上の経口ポリオワクチン(OPV)の達成範囲は1994年以来90%以上であったが、2002年には95%以上となり、90%以下の地区は国内247地区中6地区のみである。

## \* 補足的な予防接種活動：

エジプトは1989年に全国ワクチン接種日(NIDs)を定めた。2000年には、回数を2ラウンドから3ラウンドに増やし、国中を戸別訪問してワクチン接種するシステムを作り、ワクチン接種チームと監督者の数を増加させた。この活動により5才以下の子供でNIDsの活動が行き届いた数は2001年12月に860万人であったのが2002年12月には980万人となった。NIDsに加え準ワクチン接種日(SNIDs)が2002年3月と4月に上エジプトで実施された。

## \* 急性弛緩性麻痺 (AFP) の監視：

エジプトでは急性弛緩性麻痺 (AFP) の監視が1990年8月に開始され、システムの整備、行政区レベルでの役員の配置など監視の強化が図られ報告数も増加している。1996年以降、エジプトで発見された。

全ての野生型ポリオウイルスの遺伝子解析が定期的に行われている。2000年7月には汚水の採取などの環境の監視も開始され、採取されたサンプルの遺伝子解析により、ポリオウイルス1型の単一の遺伝子型が、7年間以上エジプトに存在することがわかった。野生型ポリオウイルス陽性率は、2001年の130サンプル中57%から2002年には162サンプル中16%と減少した。

表1：AFP監視の実施、エジプト、1998-2002 (WER 参照)

## \* 野生型ポリオウイルスの発生率：

AFP症例検出法の改良にもかかわらず、2002年にもなお7症例のポリオが確認された。1999年後半以来、野生型ポリオウイルスの検出は上エジプトの数地区に限定されていたが、2002年の7症例中6例が下エジプトと大カイロで発見された(地図1)。7症例全てが年の後半、すなわちAFP監視の強化後に発見された。そのうち6例が5才以下で、補足的ワクチン接種活動により2回以上OPVを接種されていた。

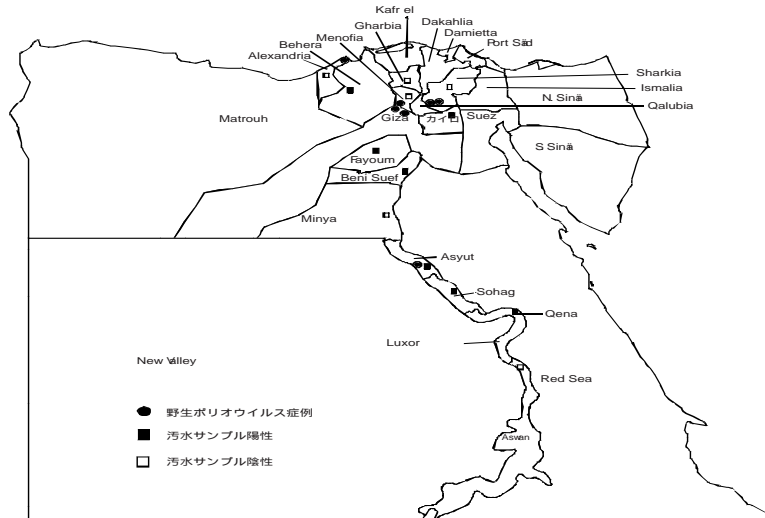
## \* 編集ノート：

エジプト政府及びポリオ根絶世界パートナーシップは、エジプトでの野生株ポリオの伝播抑止がかなり遅れたことに懸念しているが、監視機構や補足的ワクチン接種活動の質の改良が現在着実な成果をあげている。AFP監視の精度、効率とも向上し、非ポリオAFP率は2002年の前半から後半にかけてほぼ3倍となった。また、予防接種キャンペーンの普及によりワクチンを受ける子供の数が増加した。分離されたポリオウイルスの遺伝的データからは遺伝子多型の減少や系統の減少などがみられている。

これらの成果の多くは2001年にエジプトで結成されたポリオ根絶のための技術指導グループ (TAG)

の提言による。この中で鍵となった提言は、AFP 症例を報告することで報奨金を払うシステムを作ること、報告の透明性の向上、主要な保健機関での監視活動の推進、リスクの高い都市部での戸別訪問キャンペーンを進めることなどである。根絶に向けての成果の継続、拡張という点では、2002 年下半期の報告において上エジプトの歴史的な流行地域が依然見逃されていることなど、まだ多くの問題点を抱えている。全てのレベルで、根絶への動きに対する政府最高機関からの継続的なサポートが不可欠となる。

地図 1：野生型ポリオウイルスと汚水サンプル、エジプト、2002



< Bosobolo 地区におけるインフルエンザ集団発生、コンゴ民主共和国、2002 年 11 月 12 月 >

\* 疫学報告：

2002 年 11 月 16 日、コンゴ民主共和国 Equateur 州、Bosobolo 地区に多数のインフルエンザ症例が報告され、国境なき医師団(MSF)と Epicentre は 11 月 23 日から 12 月 4 日にかけて疫学調査を実施した。調査団はその地区の中央機関と 10 の保健センター (health post) からデータを収集、分析した。患者者から採取した検体はパリのパスツール研究所で分析された。保健センターのデータでは、2002 年第 35 週から 49 週の間に 6 例の死亡例 (致死率 0.8%) を含む 792 症例が報告された。流行のピークは第 44 週であった。671 例中、384 例 (57.2%) が 5 歳以下の小児、139 例 (20.7%) が 35 歳以上 (65 歳以上が 20 例) の成人であった。データが不完全なため 7 つの村を対象とした後ろ向き調査 (retrospective survey) を行ったところ、2,629 人の全サンプル中 1,245 例 (罹患率 47.4%) がインフルエンザと同定された。最初にインフルエンザが発生したのは第 35 週であった。調査対象地域では、感染のピークは第 44 週であった。致死率は 1.5% (1,245 例中 18 例) で、5 歳以下の小児 (236 例中 9 例：致死率 3.5%) と 65 歳以上の成人 (59 例中 2 例：3.2%) が高い値を示した。Bosobolo の集団感染は 2002 年 8 月に Equateur 州北部から始まった広範囲に及ぶインフルエンザ集団感染の一部であろうと判断された。致死率は小児と高齢者が高く、その多くは二次的な肺炎などの合併症のためであり、抗生物質などの効果的な治療で予防できたものである。この流行の発見の遅れは、恐らくこの地区において疾病に関する知識が欠けていた事と適切な保健サービスが実施されていなかった結果である。公的機関による定期的な疫学的サーベイランスの中にインフルエンザ様疾患を含める必要がある。

地図 1：Equateur 州、コンゴ共和国 (WER 参照)

\* ウィルス学的報告：

Bosobolo 地区で 2002 年第 48 週時に急性呼吸器感染症 (ARI) の患者 16 例から採取したサンプルの血清検査が行なわれた。インフルエンザウイルスの赤血球凝集抑制 (HI) テストでは 6 検体は陰性だったが、10 検体は A 型インフルエンザ (H3N2) 型に対し陽性であった。陽性例 10 検体中 5 検体は A/Moscow/10/99 (H3N2) 型に対して高い力価を示した。また、第 49 - 50 週に採取された ARI 患者 6 例の鼻咽頭拭い液の分析では、4 検体が A 型インフルエンザウイルス抗原陽性であり、RT-PCR により A (H3N2) ウイルスであることが判明し、さらにフェレット免疫血清を使用した HI テストで A/Panama/2007/99 (H3N2) 型との関連性が示唆された。そして、系統樹分析により、2002 年から 2003 年に北半球で流行している A (H3N2) 型ウイルスに遺伝的に非常に近いことがわかった。以上要約すると、血清学的及びウイルス学的分析結果は、A (H3N2) 型インフルエンザウイルスが、抗原性においても遺伝性においても A/Moscow/10/99 や A/Panama/2007/99 株と関連していること、従ってこれらのウイルスが今回の集団発生の原因であることを強く示唆している。表 1：インフルエンザ流行、年齢別症例数と死亡数、Bosobolo, Equateur 州、コンゴ共和国、2002、表 2：HI テストによる抗原性の特徴 (WER 参照)

( 神先秀人、小西英二、片岡陳正 )